

熊本県における集落形態の歴史的 変遷と「村落領域」

儀 永 和 貴

は じ め に

日本の伝統的村落社会には、一定のエリアである「村落領域」が形成されている。その領域を枠組みにして民俗行事や生活がおこなわれてきたことは、周知のとおりである。また、社会地理学の「基礎地域」の概念が適用でき、生活領域の基礎単位として「村落領域」が位置づけられよう。

ところが、戦後の宅地開発によって、伝統的村落の内外にも宅地化が進み、所謂混住化現象がみられる。また、生活領域の拡大などによって「村落領域」の認知にも変化をもたらしたといえよう。都市化に伴ってみられるさまざまな現象のなかで村はいかなる変化をしているのであろうか。『1970年世界農林業センサス・農業集落調査報告書^①』（以下、センサスと略）には、「村落領域」の認知に関する調査報告がみられ、極めて興味深い内容を示している。また浜谷正人の研究によれば集落形態と「村落領域」の関係が深いとされ、さらに、現在の大字や集落に直接影響した近世の集落形態との関係も指摘されている^②。

本研究の対象地である熊本県は、エンブリーの研究で有名な須恵村が存在し、須恵村型として日本の集落形態の一類型とされている。しかしながらエンブリー以降の研究は皆無に等しいといえる。浜谷による全国45都道府県についての耕地境界が明確な農業集落の割合の平均と偏差値を基に5段階に分けた図^④によると熊本県は、72.5%と全国で最も低いランクに位置する。また、一般的傾向として、標準型の村よりも須恵村型の村の方が認知率が低い傾向にあることを

実証している。

では、具体的に熊本県においては、どのような集落形態の村に「村落領域」が認知され、または欠落するのであろうか。さらに、その歴史的変遷はいかなるものなのであろうか。

以上の二点が本論の課題であり、歴史地理学的遡及法により近世肥後藩からの集落形態の歴史的変遷を考察し、さらに「村落領域」認知との関連を考察するものである。

1. 研究の諸問題

①歴史的領域研究における本研究の位置

「村落領域」は、落政村や自然村を基本として村の人々に認知される空間を指している。そのような意味において、「村落領域」研究は、歴史的領域の研究であると考えられよう。ここでは、歴史的領域の研究の中における「村落領域」研究の位置について考察してみたい。

歴史的領域の研究は歴史地理学における重要課題の一つである。それは、歴史地理学の対象となる個々の事象をその地域のなかで位置づけなければならないからである。そのために、関係する分野は極めて多く各研究者によって多岐にわたる研究がおこなわれている。その変遷は、政治地理学→集落地理学→社会地理学→人文主義地理学とその問題点が進展し歴史地理学にも多くの影響を与えている。政治地理学では、岩田孝三が『境界政治地理学^⑤』においてもその副題をみればわかるように「国界・藩界」などの行政的領域について論じている。

集落地理学では、可視的空間の領域である集落形態についての数多くの論考があり、散村・集村などが問題にされ、村落研究の多くがこれに関連している。しかし、これらの研究は、歴史学や社会学に追随した研究と思われる。

歴史的領域の研究において、地理学独自の視点に立ちその位置を明確にした

積極的な研究として社会地理学の水津一朗の研究がある。水津は、鈴木栄太郎^⑦の所説によって、まず「基礎地域」を概念規定し、さらに結節システムの解明と構造的研究の重要性を主張した。それに触発された研究として前者は、山澄元・石原潤などの村落に関する実証的論考として、後者は、西村睦男編『藩領の歴史地理^⑧』・矢守一彦編『幕藩社会の地域構造^⑨』などの多くの成果をあげ研究の深化がおこなわれた。

さらに最近になって、動物生態学の影響を受けた人文主義地理学の研究がみられる。それは、可視的なハードな空間のみを対象とした従来の地理学の反省点に立った、不可視的な人間の心的なソフトな空間への研究であり、メンタルマップにみられるような空間を対象とするものである。本研究の「村落領域」はこの論に拠っており、territory = 領域や territoriality = 領域性に関する研究であるといえ、村の人々によって認知される村の領域である。

人文主義地理学の研究には、村境からアプローチした八木康幸の研究が、また全国的レベルで「村落領域」に関し、都市化・集落形態との関係を追求した前述の浜谷の研究がある。

以上が「村落領域」に関する研究史とその成果である。本論は、これらの研究の中で集落地理学の対象とした集落形態と人文主義地理学の対象とするムラの人々に意識された「集落領域」との関係を歴史地理学的な遡及的方法と数量的処理によって考察する。

また、行き詰まりをみている村落研究の新たな課題を探る試みでもある。

② センサスの利用と研究対象地

本論では、センサスの「村落領域」に関する調査結果を基礎資料としてもちい、さらにその歴史的変遷をさぐるため、センサスの資料的価値と研究対象地を検討しなければならない。まず、「村落領域」の認知といった極めてデリケートな問題に対して、センサスの調査結果が信用できるかである。それについ

て浜谷は先の論考においてまずこの調査結果が、社会学の分野において使用^⑫されていることを述べる。さらに、各都府県を一つの独立した単位として扱っている。その理由として、「都府県内では領域概念や調査手法が統一されており、調査員の個性が若干反映される余地はあるが、各都府県単位の調査には、村落構造の実態がある方向で傾向的に反映しているものと思われるからである。」^⑬としている。本論においても同様の理由によってセンサスを使用する。ついては、熊本県を検討の単位とする必要性がある。

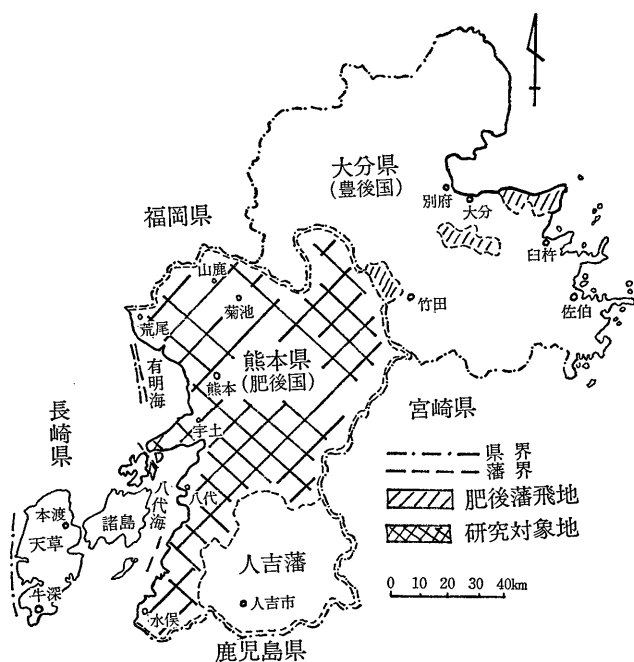
さらに、集落形態の歴史的変遷と「村落領域」を比較するので肥後藩領内に地域を限定しなければならない。その理由は、矢守の指摘のように近世における完結的地域^⑭として、また、地域形成力としての領主支配の局面から集落形態が変遷したと考えられ、肥後藩領に研究対象を絞らなくてはならない。

以上のことから、図①に掲げたように肥後藩領は、大分県に飛び地をもっているがそれは除外する。さらに、熊本県内の球磨郡は人吉藩領であるし、天草も他領であるからこれも除外しなければならない。

以下、まず村落形態の分類をおこなった上で、現在の集落形態と「村落領域」の認知の関連を考察し、つぎに集落形態の歴史的変遷をみ、さらに、「村落領域」の認知の有無がどのような集落形態の変遷を経てきた村落にみられるかを明らかにしたい。

2. 集落形態の分類

熊本県の場合、人吉藩領ではあるがエンブリーの調査で有名な一村多集落で、行政的村の中に17の自然村が各々共同体をなす須恵村が存在する。水津の研究でも『日本地誌提要』に記された、郡単位の明治初年のムラ数と昭和25年の大字数の符合率によると、熊本県は23%と低く「基礎地域は主としてその下部単位に求められる^⑮」とされた。また、それを受けた山澄は『肥後国誌』^⑯（以下、『国誌』と略）に注目し、基礎地域を行政的には意味のない藩政村内の小地域である小村に求められた。そして、須恵村型村落の濃厚な分布を想定され、集落

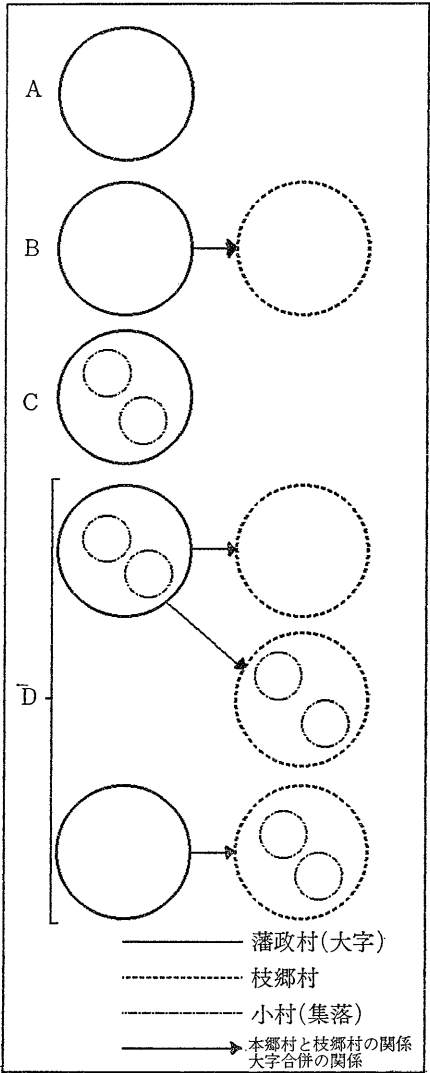


図① 研究対象地の範囲

形態からは、図②のAのような行政境界と集落の境界「村落領域」が一致する一村一集落の標準型と、Cのような行政境界と集落の境界「村落領域」が一致しない一村多集落の須恵村型があることを指摘された。しかし、「村の類別は極めて不明確¹⁷⁾」とされ、集落構成についてはそれ以上の論の展開を試みられなかった。

それを受けた筆者は、拙稿において『国誌』の基となった「新編肥後国志草¹⁸⁾稿」(以下、「草稿」と略)の凡例に基づき、近世封建制社会の村落では、藩政村相互の本郷村と枝郷村といった関係が極めて重要であると考え、それを考慮に入れ、集落形態を類型化し4分類をおこなった。

山澄が使用した『国誌』は森本一瑞が、明和9年(1772)に成瀬久敬が享保13年(1728)に著した「草稿」を引き継ぎ増補、再編集したものである。『国



図② 肥後藩（熊本県）の集落形態

誌』には凡例がないが、「草稿」の第一巻には

十三、郷帳ニ^(ママ)昼載ラレタル村ニハ、上ニ如此黒丸ヲ付是ヲ本郷帳ノ印トス、

亦郷帳村内枝郷村ニハ上ニ如此中白ノ輪丸ヲ付是ヲ枝郷村ノ却トス、此両方ノ丸等無之村は何レモ郷帳ニハ不載村ト知ルヘシ

とある。また郡別に記載されたその冒頭に総石高を載せると共に、

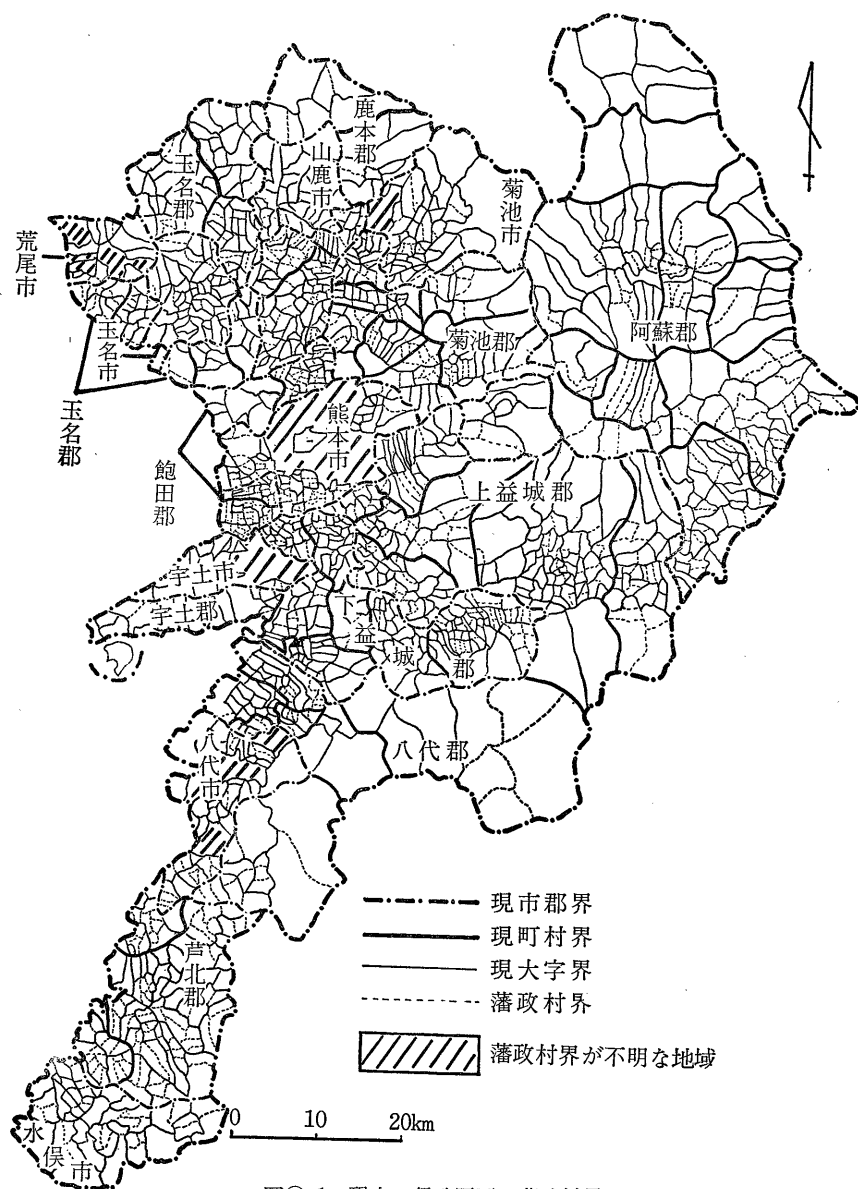
村数七十八内今郷村廿九枝郷十其外不載郷帳村名ト云（託摩郡の項）

とある。この他に各行政村単位で小村名をあげると同時に「○○村之枝郷」と記し、本郷村と枝郷村の関係を明示している。また、本郷村と枝郷村との関係は、「元禄国絵図」^②とも一致し、さらに絵図の改定と同時に「郷帳」^④も書き改められているが、これとも同一である。「元禄国絵図」は、元禄十年（1697）から改定作業が開始されているので、その頃の村を正確に分類しているものと考えられる。

『国誌』には凡例がないが再編集されたものであり、「草稿」と同様の基準で書かれていると思われる。また、成瀬と森本は深い交流を持っていることから、『国誌』が「草稿」を踏襲し、明和九年（1772）頃の村を正確に分類していると考えられる。

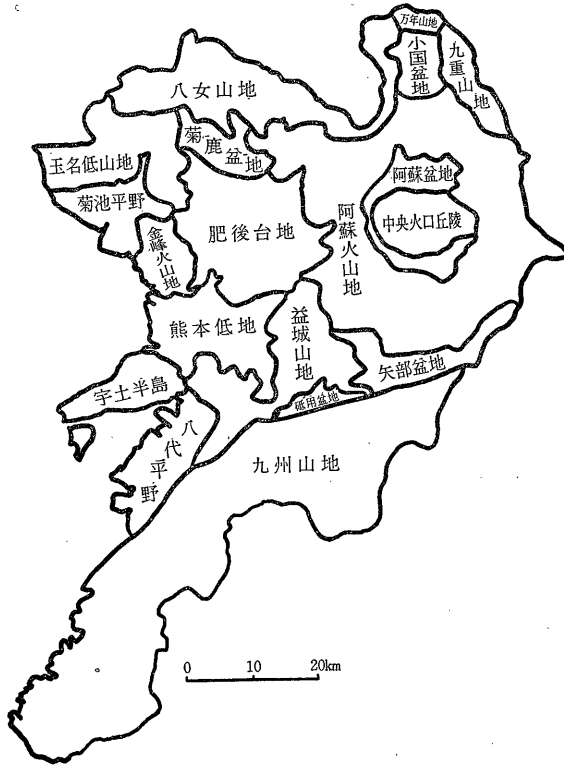
以上のことから、「草稿」及び『国誌』に記載された肥後藩の藩政村を中心にした集落形態を分類すると図②となり、A、一村一集落からなる藩政村のみの場合。B、一村一集落のいくつかの藩政村が本郷村と枝郷村の関係にある場合。C、一村多集落で藩政村内に小村を持つ場合。D、いくつかの藩政村が本郷村と枝郷村の関係にあり、両方またはどちらか一方には小村を持つ場合と4タイプがある。Aは、所謂標準型であり、Bは、そこに本郷村と枝郷村といった肥後藩の行政的意向が入っている。Cは、所謂須恵村型であり、DもB同様に肥後藩の行政的な本郷村と枝郷村の関係であり、近世の特徴である。

また、明治以降の場合では、大字と集落の関係において、標準型・須恵村型が考えられそれは、A及びCと対応する、さらに町村合併等による大字の統廃合が、行政的意向が入るので、B・Dのケースといえよう。例えば、明治9年の合併時に村数個によって新たな大字となったケースもあり、現在の大字が直接藩政村に連なるものではない場合もみられ、近世の場合と比較する時には充



図③-1 現在の行政区画と藩政村界

熊本県における集落形態の歴史的変遷と「村落領域」



図③-2 地形分類図

分な配慮が必要である。1889年市町村制執行当時は、1市15郡380町村であったが1953年の町村合併促進法の施行にともなって、当時320あった市町村が、1956年に117となり、1971年には98に激減した。また、市制の施行に伴い、町名変更等もおこなわれ、全く旧大字の位置や藩政村の境界が不明になった市も少なくはない。図③-1は、現在の行政区画および現在の大字と藩政村界の関係を示したものである。現在の大字は、『熊本縣市町村合併史』^②によって、藩政村は、大字界と藩政村界が一致する明治初年に作成された『郡村地誌』の付

図「郡村図」²³を基準に復元した。図③—2は地形分類図であり、両者を比較すると、山間部の村で藩政村の境界と現在の大字が不一致の場合が多い。また、熊本・荒尾・菊池・八代・宇土の5市のDID地区において藩政村の境界が復元不可能な地域があり、都市化との関係が深いことが知られる。

3. センサスにおける「村落領域」認知と集落形態

まず全般的傾向を考察するために、センサスの集計結果に基づき、北海道を除いた「村落領域」に関係すると思われる事項の全国値と熊本県との対比をおこなってみたい。

「村落領域」の認知に関しては、A「農業集落の属地による耕地の境界」、B「農業集落の属地による山林・原野の境界」、C「農業集落全体（耕地・山林・原野を含む）としての領域」についての明確か不明確かについての設問をおこなったデータがある²⁴。熊本県では、明確なものが耕地では、70%で全国で4番目、山林原野では42.7%で8番目、全体としての領域としては、63%で7番目に低く、特に、耕地の境界が不明な割合が高い。この「村落領域」認知に関連するように、「農業集落の範囲と大字の範囲との関係」²⁵・「農業集落と行政部落との関係」²⁶では、どれも「他の農業集落を合わせると一致する」が全国値よりも約10%あまり高く、大字・行政部落と農業集落とは一致せず、それ以下のまとまった地域が考えられ、須恵村型が広く分布していることが推察できる。また、「農業集落と部落実行組合との関係」²⁷においても「二つ以上の組合とあわせると一致する」が全国値よりも20%近く高く、農業集落内部にさらにまとまった集団が存在するケースもあるものと考えられよう。

しかし、「農業集落の形態別農業集落数」²⁸を見ると集居が全国値より10%あまり高く、散在・散居の割合が低く、須恵村型の集落形態が一般的に散在・散居が多いのに反する結果がでている。

また、「農業集落の類型」²⁹では、平地村が全国値より5%あまり高く、山地村が全国値よりも7%あまり低い。ところが、水田集落は13%低く、田畑集落

は11%, 畑地集落は1%, 山村集落は3%高い。浜谷の畑作地に「村落領域」の認知が低いとの指摘と、一般的に田畑・畑地集落が山間地に多いことから推察すると、山間地の田畑・畑地集落に「村落領域」の認知が低いものと考えられる。

以上のように、熊本県では山間地の畑作を中心とした集落に須恵村型の村落が多く、そのような集落に「村落領域」の認知も低いものと思われ、本研究の対象地においても同様の傾向があるものと考えられよう。

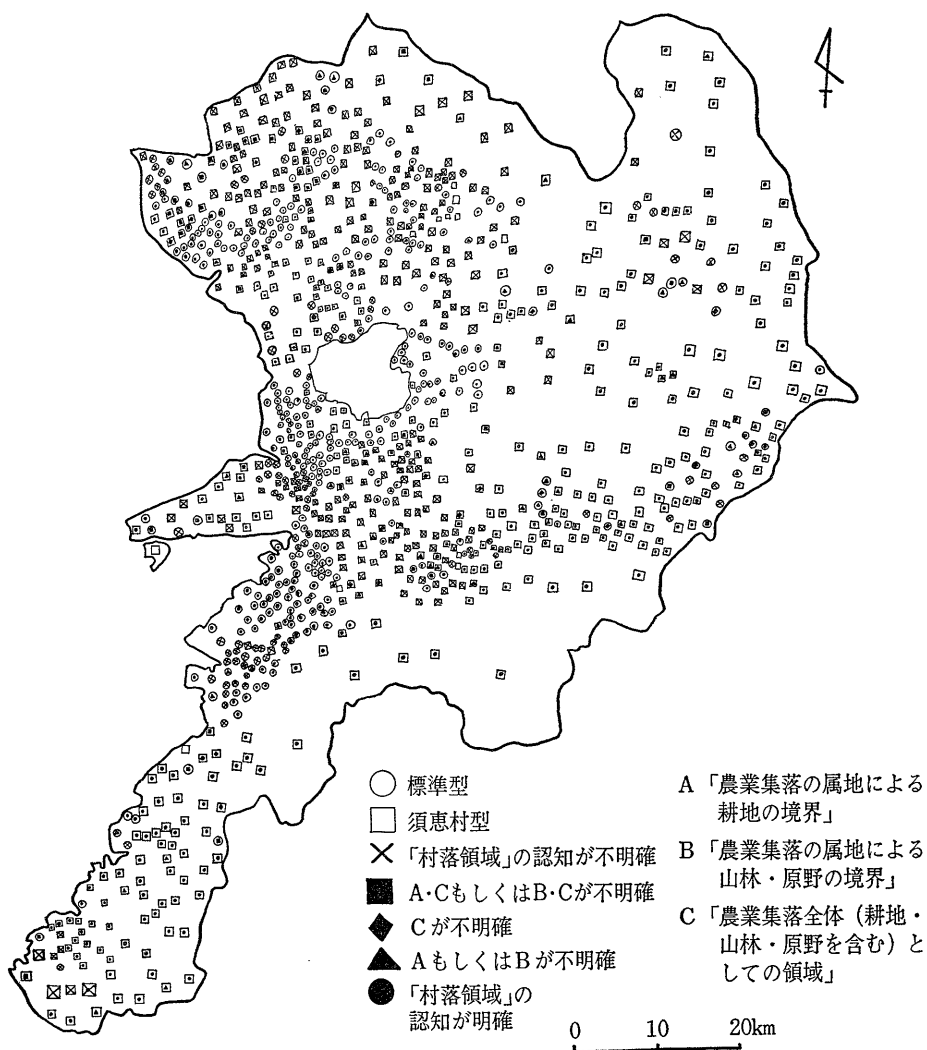
では、具体的に研究対象地においてどのような地域性があるかを考察する。図④は、前述した須恵村型・標準型といった歴史的変遷が追える集落形態の2類型と「村落領域」認知の強弱の関係を示したものである。

集落形態の2類型については25000分の1地形図によって農業集落の位置を確認し、その上でセンサスの農業集落の形態（散在・散居・集居・密居）の結果を参考に、一大字内に集落が二以上あるものを須恵村型とした。

さらに「村落領域」の認知の強弱の設定は、前述した「村落領域」認知に関するA・B・Cの3設問を基準として、点数をあたえた。A・B・Cの総てにおいて不明確な場合を最も「村落領域」が不明確とし5点、さらにA・CもしくはB・Cが不明確な集落を4点、Cが不明確な集落を3点、AもしくはBが不明確な集落を2点、A・B・Cとも明確な集落を1点と、順に「村落領域」認知の度合にしたがって5段階を設けた。また、須恵村型村落の内部に2以上の集落がある場合、点数の平均値によって「村落領域」の強弱を求めた。

その結果、平野部の村落形態は標準型が多く、須恵村型も若干見られる。しかし、それに関係なく「村落領域」の認知は高く、集落単位で「村落領域」が完結している場合が多い。

また、都市化の影響によって、「村落領域」の認知が弱く、須恵村型の村落が早く崩壊し、その集落内において「村落領域」の認知が弱いと思われた熊本市域においても「村落領域」が強く意識されている。これは、川本によって指摘⁹⁰されていることであるが、都市化の影響をまともに受けているにも関わらず、



図④ センサスにみる集落形態と「村落領執」の認知

かえってそれに反発するように領域の確保をおこなっていると考えよう。ところが、比較的新しく市制を施行した7市〔八代1940年・荒尾1942年・水俣1949年・玉名、山鹿1954年、菊池、宇土1958年〕においては、「村落領域」の認知が弱く都市化の影響がみられる。また、そのなかにおいて、とくに合併促進法施行後、市になった山鹿・菊池・宇土では「村落領域」の認知が低い。これは、行政指導による急激な都市化によって村落がその領域の確保を行わないままに、都市化の波に襲われ、「村落領域」の認知がなくなったものと考えられよう。

つぎに、山間部をみると須恵村型村落が多い。ところが、「村落領域」の認知ではかなりの地域差がある。九州山地・阿蘇火山地・金峰火山地では、須恵村型の村落に「村落領域」の認知が極めて高く、標準型に弱い。それに対して、八女山地・玉名低山地・益城低山地・菊鹿盆地・砥用盆地・肥後台地などでは、まったく逆で須恵村型に弱く、標準型に強い。また、センサスの「農業集落の形態」によれば、須恵村型・標準型に関係なく前者の九州山地・阿蘇火山地・金峰火山地のほうが、散在・散居が多く、後者の他の山間部では集居・密居が多い。これは、散在・散居に「村落領域」の認知が低く、集居・密居に認知が高いとか、須恵村型に認知が弱く、標準型に強いとかいった一般常識に反している。

以上のように、現在の須恵村型・標準型などの類型、センサスの農業集落の形態などとは、まったく異質な影響によって「村落領域」の認知が決定されていると考えられよう。

4. 集落形態の歴史的変遷

肥後藩における集落形態が具体的にわかる資料は、すでに集落形態の分類によって使用した「新編肥後国志草稿」・『肥後国誌』である。しかし、残念なことに『国誌』の方は阿蘇郡の一部の記載を欠いているので直接研究対象地を比較できない。ほかに、藩政村（大字）と小村の数が記載されている、享保年間～元文年間までに補訂の『肥州録』^⑩・文政元年（1818）の『諸御郡村附帳』^⑪・明

治7年の『明治前期全国村名小字調査書』^③（以下、『調査書』と略）・明治12年の『熊本県郡区便覧』^④などがある。また、現代のものは、すでに前述したセンサスを使用した。

以上の7資料の集落形態の変遷を比較し、それと小村および集落の総数と各地誌の神社数を対比したのが表①である。一般的に一集落に対し一神社が氏子圏をもっており、集落の総数と比較することによって、集落の共同体的性格の強弱がある程度わかる。共同体的性格の強弱は、「村落領域」の認知と関係があると思われ、また鈴木も自然村の指標として氏子圏をあげている^⑤。神社数と集落数が一致しない場合、氏子圏が集落とずれていることを示しており、同時に「村落領域」認知が集落からずれているものと思われる。「村落領域」認知を知る資料が無いために一応の指標として対比を掲げておく。

先に述べたように『国誌』は阿蘇郡の一部を欠いているので直接の比較にならないが、ほかに有力な資料がないので参考として掲げておく。「草稿」とセンサスを比較すれば、標準型では54%の増加、須恵村型では17%の減少であり、藩政村と大字では、13%の増加であり、新しくできた村が標準型の方が多かったと考えられる。また、小村（集落）数が江戸時代を通じて増加するが明治以後減少しており、これによっても須恵村型村落が徐々に減少していることがわかる。さらに、小村に対する神社数の対比は低くなっており、時代の変遷とともに「村落領域」の認知が低くなる傾向になっており、須恵村型の小村（集落）の「村落領域」の認知が低くなる傾向にあったものと思われる。以下、具体的変遷を、「草稿」・『国誌』・『調査書』について考察してみたい。

まず「草稿」についてみれば図⑥—1となり、熊本低地・八代平野などは標準型が、八女山地・益城低山地・玉名低山地などには須恵村型が多く存在し、平野村に標準型が、山村に須恵村型といった一般的傾向を示している。また、肥後台地は須恵村型、菊鹿・矢部・阿蘇盆地では標準型・須恵村型が両方とも同じ程度に分布する。これらは、地形的特色をストレートに受けたものと判断できよう。ところが、九州山地・阿蘇火山地では標準型が、また菊池平野にお

熊本県における集落形態の歴史的変遷と「村落領域」

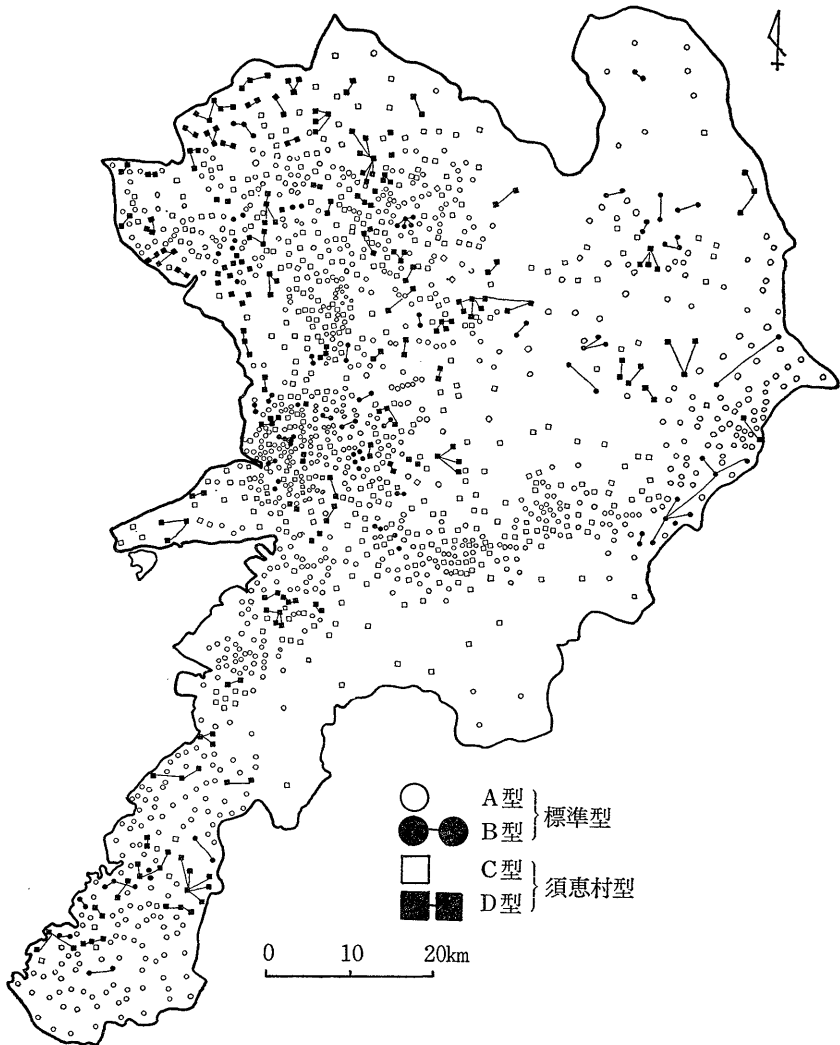
表① 集落形態の変遷と神社との関係

| 資料名 集落形態 | 草稿 (1728年) | 国誌 (1772年) | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|------------------|----------------------|---------------|-----------------------|----------------|
| A 型 | 623 | 796 | | | | | |
| B 型 | 61 | 45 | | | | | |
| C 型 | 521 | 507 | 肥州録 享保～ 元文 | 諸御郡村 附帳 (1818) | 取調書 (1874) | 熊本県郡 区便覧 (1879) | センサス (1970) |
| D 型 | 109 | 118 | | | | | |
| 標準型 | 684 | 841 | 659 | 923 | 1088 | 1282 | 1265 |
| 須恵村型 | 630 | 625 | 618 | 695 | 731 | 629 | 520 |
| 藩政村数 (大字数) | 1549 村 | 1604 村 | 1547 村 | 1509 村 | 1819大字 | 1718大字 | 1685大字 |
| 小村数 (集落数) | 3381 村 | 3604 村 | 3371 村 | 4053 村 | 3402集落 | 3376集落 | 3369集落 |
| 藩政村数対 小村数 | 45% | 47% | 45% | 37% | 54% | 50% | 53% |
| 神社数 | 1555 社 | 1395 社 | 1555 社 | 1753 社 | 1235 社 | 1235 社 | 1171 社 |
| 小村数対 神社数 | 46% | 41% | 49% | 43% | 36% | 36% | 35% |

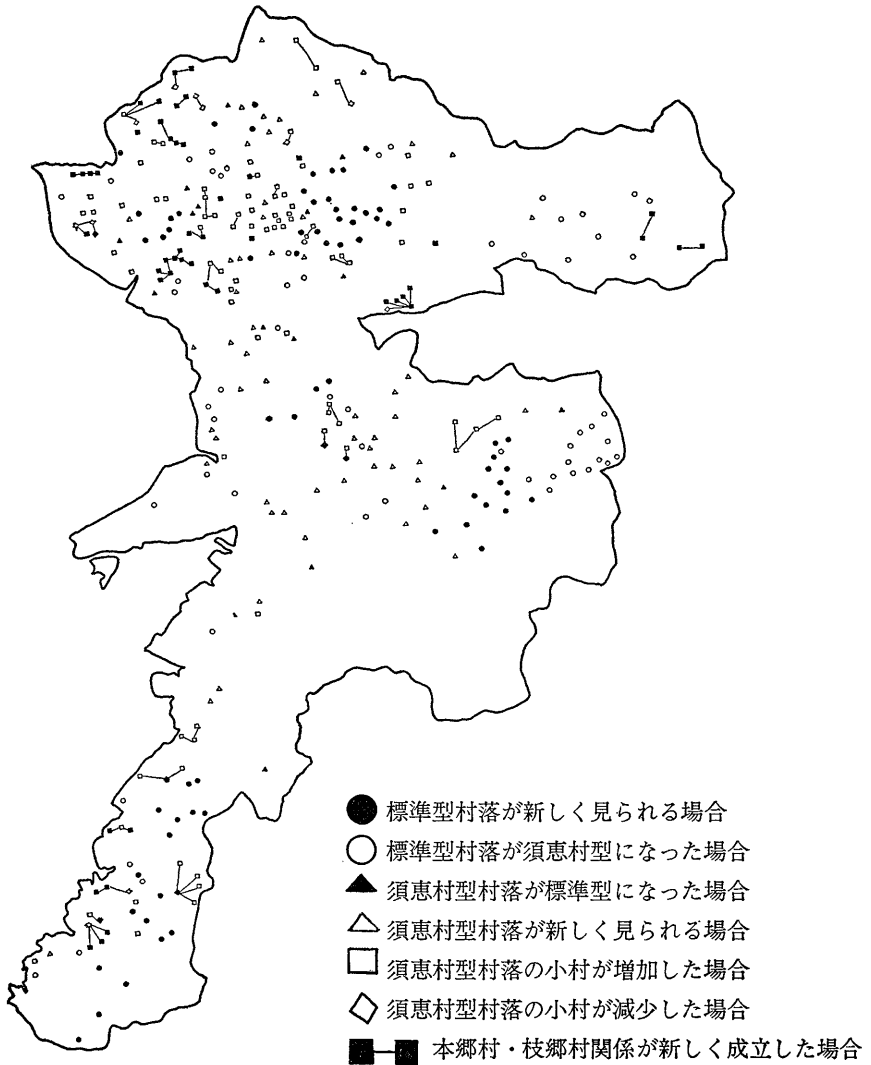
いても須恵村型が多く、一般的傾向とは逆になっている。また、本郷村と枝郷村の関係は山村に多く、平野村ではあまりみられない。

これらの地域的特徴は、「村落領域」の認知や土地開発などと複雑に関連している。九州山地に須恵村型が少ないのは、山間地ゆえに開発が遅れて新しい村が多く、たとえ地形によって分断された集落があっても「村落領域」の認知が弱く、また生産力が低く小村としての独立性が弱かったことに起因すると考えられる。葦北郡を例にとれば、「慶長国絵図」^⑧では19村であったのが、「草稿」になると112村になっており、100近くの新村が誕生している。また、これらの新村のほとんどが標準型であるのに対して、「慶長国絵図」に記載された村は、「草稿」においても須恵村型である。また、阿蘇火山地においても同様のことが考えられよう。

菊池平野に須恵村型が多いのは、極めて政治的要因が強いものと思われる。



図⑤-1 「新編肥後国志草稿」の集落形態



図⑤-2 『肥後国誌』にみる集落形態の変化

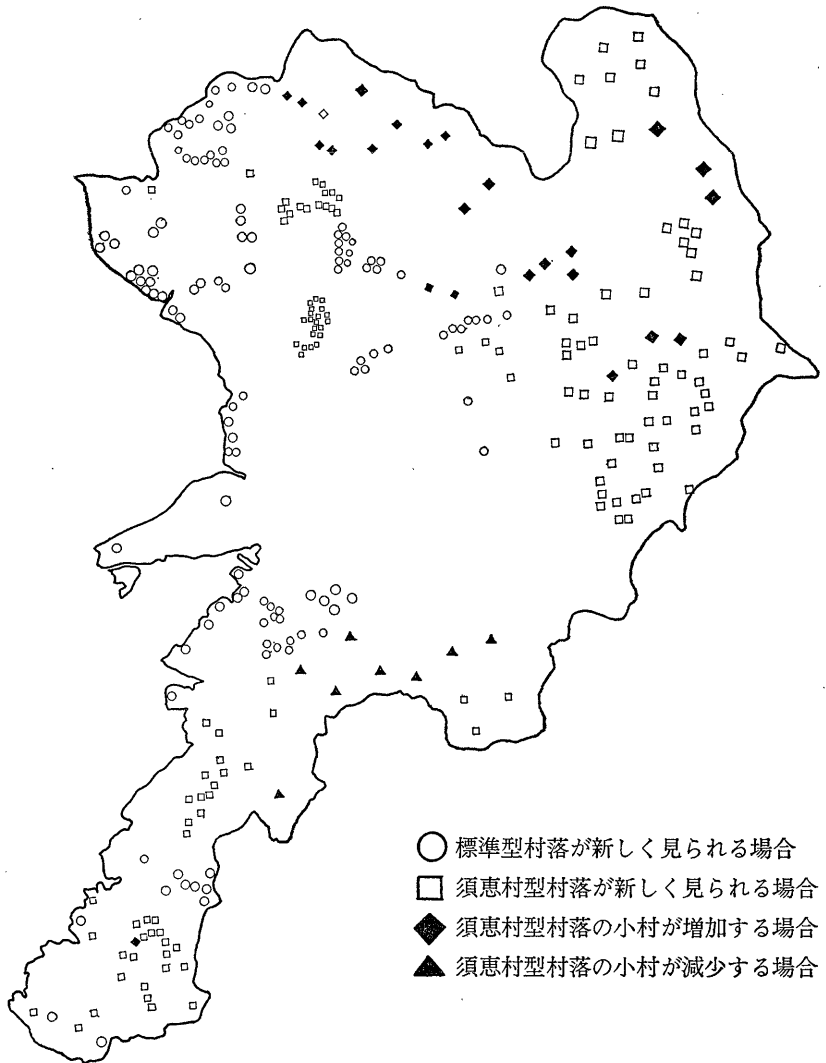
森山恒雄^⑦の検討によると、菊池平野は豊臣蔵入地であつたらしく、所謂村切りが肥後藩領のなかでも特異な地域であつたものと考えられ、それが影響しているのではなからうか。また、葦北郡も一部が豊臣蔵入地であつたことが森山に指摘されている。このように、豊臣蔵入地に限って一般的な傾向と逆の平野村に須恵村型、山村に標準型がみられるのは、偶然の一致とは思われず何らかの関係があるものと推察できよう。

このほか、本郷村と枝郷村の関係が山間部に多く見られるのは、開発による分村といったことが深く関係しているものと思われる。具体的にはつぎの『国誌』の場合で考察してみたい。

図⑤—2は、「草稿」と『国誌』を比較し、村落形態が変化した村だけをドットしたものである。前述したように、阿蘇郡の一部を欠いているので全域については比較は行いえないが、地域的特色はうかがえる。

全体的には、「草稿」の場合と変化は少ないが、須恵村型の本郷村と枝郷村の関係が変化するケースが33例みられる。また、須恵村型の村落内部の小村数が増加している。『国誌』に記載されている範囲の須恵村型村落の小村数と「草稿」のそれを比較すると7%の増加であり、新しく開発された村に生産力が増加し小村として自立していったものと考えられる。また、藩政村の増加のほとんどは標準型であり、4%である。これらは特に山間部の「出分」と称する百姓切添による新田開発と新村の成立にあつた。さらに、小村と神社との比率も5%あまり低くなっている。枝郷村が新しくできた場合、神社を勧進することはあっても小村が新しくできたからといって神社を改めて設けることはしていない。小村が分離独立しても、分かれる前の小村に従属する関係にあつたと思われる。

つぎに、明治7年の『調査書』における集落形態を考察する。図⑤—3は、『国誌』と比較して変化した村落形態をドットしたものである。山間部において須恵村型が多くみられる。特に、阿蘇郡・葦北郡に多く、阿蘇火山地・九州山地などの開発が遅れた地域であり、ようやく生産力も増加し、小村として独



図⑤-3 『全国村名小字取調書』にみる集落形態の変化

立しえたものと考えられよう。『国誌』において標準型の類型を示す新村が、徐々に地形的制約を受けて内部で小村が分離独立し須恵村型になったものと思われる。それとは逆に従来須恵村型の村落が多かった八女山地・菊池平野・八代平野・菊鹿盆地で標準型へと変化している。また、標準型が見られた肥後台地に須恵村型へと変化するケースが多い。このように、明治の初年段階において始めて、ほぼ地形に相応した集落形態となった。

最後に、センサスの結果に基づく1970年の村落形態について、明治の『調査書』との比較や明治以降の大字の合併との関係などを考察する。これについては、前掲の図④を参照してもらいたい。

1970年では平野部に標準型・山間部に須恵村型といった形態が明治の段階より明確に区別できる。山間部でも比較的平地をもつ盆地などでは、標準型がみられる。

また、明治9年の村の合併によって、旧来の須恵村型の村が合併して、さらに複雑な須恵村型の村がつくられたり、また、旧来標準型の村落が合併後、須恵村型になったケースも若干ある。これは、「村落領域」の認知を山間部では弱くなる影響をあたえたと思われる。しかし、平野部では標準型が須恵村型にもしくは須恵村型がより複雑な須恵村型になろうとも集落単位での「村落領域」の認知は強く、集落形態との関連性は考えられない。

以上のように、肥後藩の集落形態は、流動的であった。開発の遅れた阿蘇火山地・九州山地などでは、始めは標準型の集落形態が時代を経て、その地形的制約によって須恵村型をみるようになる。他の山間部は、須恵村型の集落形態をより複雑にしながら現在まで連なっている。また、平野部においては、始め須恵村型もみられるが徐々に標準型へと変化している。これは、平野部において早く須恵村型が崩壊したことを示すものである。江戸時代前期以前に須恵村型を示していた集落形態は、崩壊し標準型へと移行していった。

お わ り に

以上、熊本県における「村落領域」と現在の集落形態に直接影響を与えたと思われる、近世からの集落形態の歴史的変遷をみてきた。以下、4点のまとめを掲げておきたい。

①現在の「村落領域」認知は、須恵村型に弱く、標準型に強いという一般的考えがある。これは、須恵村型の村落形態が崩壊し暫時標準型へ移行するといったことを想定したものである。それは、藩政村（大字）内の小村（集落）が各々独立し完結した共同体的性格をもっている近世的段階から、小村の共同体的性格の崩壊を通じ須恵村型の村落は標準型へ変化する事を意味する。

ところが現実には、村落や集落の成立状況によって集落形態が形成され、それに応じて「村落領域」の認知が作られていくのである。

九州山地や阿蘇火山地など新しく村が形成され、標準型から須恵村型へと移行した村落では、現在「村落領域」の認知はきわめて強く、集落で完結している。ところが、江戸前期にすでに須恵村型をしめしていた他の山間部においては、形態的には現在でも須恵村型であるが、「村落領域」認知は集落単位ではない。すなわち、本来的には、須恵村型の村落は、集落単位において完結する「村落領域」認知を有するはずであるが、それは崩壊し、「村落領域」の認知は行政区画である大字へと移行したものである。しかし、集落の形態だけは地形的制約のために須恵村型を示しているのである。

②つぎに指摘できるのは、「村落領域」認知の強弱が明治以降の村や大字の合併と関係が深いことである。

平野部は、早くから須恵村型から標準型への移行を江戸時代を通じて示し、藩政村内に一集落といった指向をもった。たとえ明治以降に標準型の村落が合併して須恵村型になっても、旧の村や大字単位での「村落領域」の認知が強い。そのような村落においては、実質的な須恵村型である集落単位での「村落領域」認知が強く、新しい須恵村型の村落が形成されつつあるものと思われる。それ

とは逆に、現在「村落領域」の認知が弱い山間部では、村や大字の合併は、認知をより弱体化したと考えられよう。もともと、江戸時代を通じて須恵村型の「村落領域」の認知が弱まっていたところに、明治以降に合併による複雑な須恵村型がつくられ、認知はさらに弱くなった。

③さらに、都市化現象によって一般的には「村落領域」の認知を弱くすると考えられる。確かに、市街地では直接的な影響を受けて認知は弱い。しかし、その周辺部では、かえって「村落領域」の認知が強くなる傾向を示している。これは、村落住人意識のレファレンスの一つであるテリトリアリティーが示されているものと思われる。テリトリアリティーとは、「村落領域」の認知とは切り離せない人間の縄張り行動である。村落住人が都市化の波によって、自らの安全と親しみを感じる区画・評価された空間である「村落領域」を失うことに対して、この空間を区画・表示・防御する行動（テリトリアリティー）におよんだ結果であると考えられる。

④最後に今後の課題を掲げておきたい。本論は、肥後藩・熊本県といった枠組みのなかで全般的傾向を検討するにとどまった。まず今回の結論を土台として、個別の村における実証研究を試みなければならない。第一にセンサスの調査結果を踏まえ、年齢差・性別差・混住化の村落における旧来の村の住人と新しい住人の「村落領域」認知の違いなどを厳密に調査する必要がある。その上で第二に「村落領域」の認知の強弱の決定的要因はなんであるのか。またそれが村落や住人達にとっていかなる意味があるのか、とくに行政的側面との関係を求めなければならぬ。

また、本論においては、テリトリーに関して「村落領域」のみを対象とした。ハゲット、P.は、「人間社会が生活上境界を設け、個別的に重複しない形で」設定したエリアをテリトリーと呼んでいる^⑤。今後さらに、「村落領域」をとりまく領域である郡・藩・国といったさまざまなテリトリーを考察し、地域構造的な研究として位置づけなければならない。以後他地域との比較検討も進め、改めて論述したい。

熊本県における集落形態の歴史的変遷と「村落領域」

註

- ① 農林省統計調査部『1970年世界農林業センサス・農業集落調査報告書』（農林統計局協会，1972年），本論文で具体的に使用したのは『集落別調査カード』である。
- ② 浜谷正人「日本農村における社会空間の実証分析—いわゆる「村落領域」を事例として—」（歴史地理学，120号，1983年）
- ③ エンブリー（植村元寛訳）『日本の村—須恵村』（日本評論社，1975年）
- ④ 前掲浜谷論文（注②）p. 4.
- ⑤ 岩田孝三『境界政治地理学—わが国，国界藩界に就いての政治地理学的研究』（帝國書院，1953年）
- ⑥ 水津一朗『社会地理学の基本問題』（大明堂，1964年）
- ⑦ 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』（時潮社，1954年）
- ⑧ 山澄元『近世村落の歴史地理』（柳原書店，1982年），石原潤「集落形態と村落共同体」（人文地理17—1，1965年）
- ⑨ 西村睦男編『藩領の歴史地理』（大明堂，1968年）
- ⑩ 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』（大明堂，1970年）
- ⑪ 八木康幸「村境の象徴論的意味」（人文論究，34—3，1984年）
- ⑫ 川本彰『むらの領域と農業』（家の光協会，1983年）
- ⑬ 前掲浜谷論文（注②）p. 4.
- ⑭ 前掲矢守論文（注⑩）序言
- ⑮ 水津前掲書（注⑥）p. 10.
- ⑯ 『復刻版肥後国誌』（青潮社，1984年）を使用した。
- ⑰ 山澄前掲書（注⑧）p. 63～66.
- ⑱ 拙稿「肥後藩における歴史的領域の一考察—飽田郡を中心として—」（花園史学7号，1986年）
- ⑲ 熊本女子大学付属図書館上妻文庫所蔵
- ⑳ 熊本大学付属図書館永青文庫所蔵
- ㉑ 同 前
- ㉒ 熊本県総務部地方課『熊本県市町村合併史』（熊本県，1969年）
- ㉓ 熊本県図書館所蔵，明治5年9月の太政官の「皇国地誌」編纂方針を受け，同16年までに完成している。
- ㉔ 前掲書（注①），p. 32. 及び『一その他の農業集落類型編—』，p. 38～39. p. 590.
- ㉕ 同 前，p. 33.
- ㉖ 同 前，p. 52.

- ②7 同 前, p. 53.
- ②8 同 前, p. 56.
- ②9 前掲書(注①), 『基礎類型編一』 p. 44. p. 706.
- ③0 前掲浜谷論文(注②)
- ③1 『肥州録』(森下功・松本寿三郎編『肥後国地誌集』, 青潮社, 1980年所収)
- ③2 松本雅明監修(『肥後読史総覧』, 青潮社, 1980年所収)
- ③3 内務省地理局編纂物刊行会編『明治前期全国村名小字調査書第6巻』(『内務省地理局編纂前本叢書明治前期地誌資料35』ゆまに書房, 1986年所収)
- ③4 熊本女子大学郷土文化研究所編『熊本県郡区便覧』(『熊本県資料集成第6巻』国書刊行会, 1985年所収)
- ③5 鈴木前掲書(注⑦)
- ③6 熊本大学付属図書館永青文庫所蔵
- ③7 森山恒雄『豊臣氏九州蔵入地の研究』(吉川弘文館, 1984年)
- ③8 ハゲット, p. (野間三郎訳)『立地分析上』(大明堂, 1972年) p. 64~65.

＜追記＞ 本論文脱稿後、関戸明子氏の「尾張西部における村落構成と空間認識」(人文地理 39—5 1987年)をみるに至った。この論文は、アンケート調査を基にしたもので、p. 82. に「村落空間の認識は、混住化の進んでいる村落で弱くあらわれておりムラの機能の強弱に対応している。」とした重要な指摘がある。

関戸氏の論文に学ぶところが多く、今後熊本県における一村単位での事例研究の参考にしていきたい。

(大学院博士後期課程・日本史学専攻)